魔法ノコトバ

月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法ノコトバ

【Ｎコード】

Ｎ４０６０Ａ

【作者名】

月

【あらすじ】

「私が欲しかったのはこんなものじゃない」そう彼女に言われた晃の話。今の時代物よりも心…それをちょっと書いてみようと思いました。楽しんで読んで頂けたら幸いです。

第1話：お目覚め

目を開けるとそこは真っ青な空に波の音がした。
今日は彼女と海に来ていたが猛烈な眠気に襲われ寝てしまったみたいだ。
起き上がりあたりを見回すと隣にには一人の女性がいた。

彼女の名前は葵　結衣。一応僕の彼女。
歳は一つ上、いつも強気な彼女だが僕の前でだけは違っていた。弱いところも、かわいいところもみせてくれて。
そんなギャップに惹かれて付き合った仲だ。

結衣は僕の顔をのぞいて何か言いたげな表情をしている。
「せっかくの休みに一緒に海に来たのに私をほうっておいて寝るってどういう神経してるのかしらね」

どうやらずいぶんと怒ってらっしゃるみたいだ。

第2話：出会い【前】（前書き）

いきなり過去にいきます。

第2話：出会い【前】

僕と彼女が出会ったのはとある歯医者だった。

親知らずがどうにも痛くなってしょうがなく近所の歯医者に見てもらったときに初めて出会った…というか見た。

歯科助手をしていた彼女はこんにちはと僕にあいさつをした。

見た瞬間眼が離せなかった。

こんにちはと挨拶をして指定された席に座った。

それからは普通に治療をした。どうやら痛みの原因は生え切っていない親知らずが噛むたびに肉を挟んでいるようで化膿しているそうな。

『抜いちゃいましょう』と歯医者はいいその日のうちに抜かれた。

痛み止めの薬と抗生物質をもらった。なんでもばい菌が入ったら大変なことになるようで三日は飲まないといけないらしい。

次は一週間後の3時に来てくださいと言われた。ちょっと虫歯があるらしい…鬱だ。

ありがとうございました。と歯医者の人たちに挨拶をしてその日の治療は終わった。

僕が帰って行くのを彼女が後ろから見ていたことなどこの時僕は知るよしもなかった。

☆

一週間後歯医者を訪れると彼女はいた。こんにちはと挨拶を交わす。

『今日は先週抜歯したところの消毒と虫歯を一カ所治療しますね』

と簡単な説明のあとに15分ほどで治療が終わった。

しばらく座っていると奥歯があまりうまく歯磨きできていないようなのでその指導を受けることとなった。

ドクンドクン

心臓が大きく脈打った。

彼女だ。

『お口開いてくださいね、あとこれを持って下さい』
柔らかな、ずっと聞いていたいような声だった。

歯磨き指導の間彼女の話を聞きながら鏡ではなく彼女を見ていた。
綺麗に整えられた眉、薄い茶色のアイライン、綺麗な眼、茶色の髪は天然の色のようだ、口元はマスクをしていて見えなかったが…間違いなく美人だ。
こんな綺麗な人を見たことがない。
僕は無意識に綺麗だと呟いてしまったらしい。
彼女が頬を赤く染め
『アリガトウ』と僕にだけ聞こえるように言った。

このあと実際にやってみて下さいと言われほとんど話しを聞いてなかった僕はこうですか！？となんども聞いたせいで彼女に笑われてしまった。

彼女の丁寧な指導が終わり治療椅子からおりると
『珍しい名字ですね、私室生って初めて聞きました』と言われた。

『実家が福島なんですよ～でも、福島でも少ないですけど』と僕は少し笑っていうと彼女もふふっと笑ってくれた。

『今日はこれでおしまいです、お大事に』

第3話：出会い【後】

ありがとうございました！と頭を下げ会計のところへ向かった。
会計をしているのは４０歳ぐらいのおばさんでとても親しみやすい人だ。

『今日はこのぐらいね～この前抜いたところ大丈夫だった？』
『大丈夫でしたよ～まだちょっと違和感ありますけど』
というとおばさんは笑っていた。
『それより、結衣ちゃんといい感じだったじゃない』
『結衣？』誰だかわからず首を傾げる。
『歯磨き指導してた人よ、私あんな楽しそうに話してるの初めて見たわ』

会計から彼女をみると無表情で違う人の歯磨き指導をしていた。

『そうなんですか』
おばさんは何かを思い付いたように紙に何かを書いている。
『はいこれ、結衣ちゃんの携帯番号悪用はしないでね』ニコッといたずらそうな笑みを浮かべ渡してきた。

『…ありがとうございます！』
今までにないぐらい大きな声でお礼を言うと周りの人が不思議そうに見られちょっと恥ずかしくなった。

『次は一週間後の3時ね、お大事に。それとがんばってね』と笑っていた。

頑張りますと歯医者を後にした。
アパートに戻り冷蔵庫から５００ミリリットルのミネラルウォーターをとりだし一気に飲み干す。

ドクンドクン

結衣と言われる人の顔を覚えている。
絵を描けと言われればそっくりなものだって描けるほどに鮮明に覚えている。

僕の右手にはその彼女の携帯の電話番号

思わず…にやけた。

しかし、その後に電話することはできてもすぐに切られたらどうしようという不安がよぎったが…まあ、なんとかなるだろうと思った。

僕は楽天的な性格だ。悪い方を考えるよりもいい方しか考えない。
自分のいいところでもあるし悪いところでもあると思うが嫌いではなかった。

悪いことを考えるのは大事だけど、それではきっと前には進めないと思う。

『デートに誘えるといいなぁ』

僕は部屋のソファに座りどんなことを話すか考えた。

結局なにも思い浮かばず夜になってしまったのはいうまでもない。

第４話：電話【前】

携帯を見つめる。

一年前に買ったものだがいまだに傷一つない。
これにはわけがあって、前の携帯のときに扱いが酷く傷だらけになり、それを親に見つかり思いっ切り怒られたのだ。
携帯を投げて壁にぶつけたり、道に落としたり…こんなことをしていたら傷だらけになるのは当たり前か（笑）

こんな扱いするならもう買ってやらないと言われて以来大事に扱うようにした。
今僕は迷っている。

時刻は８時

辺りは暗く空には満点の星空

おそらく彼女は仕事も終わり家かアパートでゆっくりとしていることだろう。
彼氏といるのかな？
一瞬悪い予感がよぎったがおばさんのコトバを思い出し、すぐに消え去った。

『あんなに楽しそうに話してる結衣ちゃんみるの初めて見たわ』

普段は冷たい人なのかな？それとも…

そんなことを考えていると携帯が鳴った。

『うわっ！？』

僕はびっくりして携帯を手放してしまった。

画面を見ると皐月と表示されている。

山中皐月大学の女友達で麻生宗則、佐藤愛と僕の四人でよく飲み会をする。

不思議なことにみんな恋愛対象ではない愛には年上の彼氏がいるし、皐月と宗則は最近くっつけようと努力しているが今だなんの成果もない。

『…もしもし』

恐る恐る電話に出てみる。

『もっしもぉ～し』

耳がキーンとなるほどの大きな声がかけられる。

『うるさい！』

『あはは～いいじゃん♪』

悪びれる様子もなく笑っている。なにやら後ろの方ではがやがやと

うるさい。

『全く、びっくりさせんなよな～今どこいんの？』

『今はみんなと飲み会ですよ！室生晃くんにもメールしたんですけどねぇ！』

ろれつがまわってない…どうやら酔っているみたいだ。

言われてみると歯医者から帰ってきたときにメールが来ていたのを思い出した。

『あ～ごめんな、忘れてたわ』

『ぐすっ…そうやって私を捨てるのね』と泣き真似をしている。

『まてまてまて！』

皐月は酒を飲むと絡むというめんどくさい性格の持ち主だ。これは適当な理由いって切った方がいいな…

『今めんどくさいとか思ったでしょ』

『！』

『どぉ～せ、私はめんどくさいですよぉ！あ～むねのりぃあきらがいじめたぁ…』

この声を最後に電話が切れた。

『はぁ…これだから皐月は苦手だ。これがなきゃいい人なのにな』

うんざりしてるとまた携帯が鳴った。

画面をみるとみたことがない番号からだった。

『もしもし』

『……』

しばらく待ってみたが反応がないので名前を言ってみる

『…もしもし室生晃ですけど、どちらさまですか？』

『……もしもし』

彼女だ。この声忘れるわけがない。

第5話：電話【後】

ドクンドクン

心臓が大きく脈打つ

『あ、あの！今日歯磨き指導してもらった室生晃です！覚えてますか？』

『…よかった、ちゃんと繋がって』

どういうことだろう…

『私ねさっき何回か電話したんだけど話し中だったから番号間違いだったのかなってちょっと不安だったの
でも、間違いじゃなくてよかった！』

『はい！』
ふと考える…僕番号教えてないしな。誰だろう…

『あ…この番号はね受け付けの絹枝さんが教えてくれたの。番号教えちゃったって言われてえぇって驚いてたら、これあの子の番号ねって。』
彼女は少し遠慮がちに伝えてきた。
あのおばさんは気が利くのか効かないのか…
びっくりしすぎて何も言えない僕を彼女は何か察知したのか

『…迷惑だった？』
『いえ、びっくりしすぎて何も言えなかっただけです』

これは本当だ、実際さっきは心臓が止まるかと思った。

『本当は…』

『ん？どうしたの？』

『僕からかけるつもりだったんです、でも何話していいか考えてたらあなたの方からかかってきて、出鼻をくじかれた気分』

『なんだそんなことかぁ』

『大丈夫、私も話題ないし』
と彼女は笑った。僕も自然に笑っていた。

僕は思い出したように彼女に語りかけた
『そういえば、名前教えて下さい…聞くの忘れてました』
『やだ』

『そうですかいやなんだ…ってえぇ！？』
彼女は電話の向こうで大きく笑っている。

『冗談よ冗談
私は葵　結衣っていうの。年はあんまり言いたくないけど２２歳、よろしくね』

『よろしく！って僕と一つしか違わないんですか！』

『なにその反応は？』

『もうちょっと上なのかなって思ってました』

ふんっと彼女は少し怒ったような口調で

『どうせ私は老けてますよ～』

僕は慌てた怒らせるつもりはなかったのだが、思ったことを口にしたらこれだ今後は気をつけよう…

『ごめんなさい、なんていうか結衣さんって綺麗だから年なんか無いように思えたんです』

どういうこと？と彼女は理解出来てないようだった。

『ん～うまく言えないけれどとても綺麗で素敵です！』

すると結衣はアリガトウと恥ずかしそうに返してきた。

それからは色んなことを話した。

お互いの趣味や好きな本、音楽、地元の話など話は尽きなかった。

『もうこんな時間…お風呂はいって寝なきゃ』

結衣の少し寂しそうな声がする

時計をみると１１時大学生の自分からみるとたいした時間ではないのだが働いてると遅い時間なのかな…

『ごめん！そんなことに気がつかなくて付き合わせちゃって』

『ううん、いいの私も楽しかったし♪』思わず最後の音譜がでてきそうなほど楽しそうな声だった。

『結衣さん…アドレス教えて！電話だと迷惑かけちゃうこともあるし、メールだったら気がついたときに返せばいいからさ』

『ん、いいよ！』

お互いにアドレスを交換した。

『それじゃおやすみなさい』

『おやすみ』

『…』

『…』

『…』

『…』

『僕からは切れないから結衣さんからきって、お願い』

『ん、わかったそれじゃあ』

『プツ、ツーツーツー』

長い電話が終わり、綺麗な声から無機質な音に代わり耳に流れる。

こんな気持ちになるのはいつぶりだろう…

例えるなら、甘酸っぱい初恋のような味。

そんな余韻に浸っているとお気に入りの着信メロディーが鳴る。

ｍａｓｔｅｒ＊ｐｉｅｃｅの魔法ノコトバだ

メールのようだ

開くと

『葵　結衣です。今日はとても楽しかったよ！また、お話しようね！

それじゃ、おやすみなさい。』

結衣らしい丁寧な文章で書かれていた

何か返事をしたが胸がいっぱいで何を書いたか覚えていない。

何かを書いて送った。後で確認して発狂するのだが、それはまた先の話。

今は幸せな気持ちに浸っていようと思う僕なのでした。

第5話：電話【後】（後書き）

電話といえばレミオロメンですね（笑）あの曲好きです♪
ｍａｓｔｅｒ＊ｐｉｅｃｅの魔法ノコトバはこの小説のモチーフです。是非聞いてみてください。

第6話：デート

『はぁ…緊張するなぁ』
そこは何処にでもあるようなコンビニの雑誌ブース
雑誌を手に取り先程から腕時計をチラチラと見ている。
どうみても待ち合わせの男だろう。
こうなったのには訳がある。

☆

起きると結衣からメールが入っていた。

『おはよぉ！いいよ～☆場所は任せるよ。楽しませてね』

なんのことだろう…

昨日送ったメールを見て愕然とした。

『おやすみなさい！！よかったらなんですけど…今度飲みにでも行きましょう！』

頭を抱えた。

奥手な僕がなんてこと送ったんだろう…

そりゃ今まで人並みに付き合ってきたし、あっちの体験だって結構あると思う。
でも、それは全部相手から言われてそういった行動をした訳で、自分から誘うっていうことは無かった。
いつも相手に合わせて嫌われないように、ただただ付き合っていた。
いや、付き合ってたというよりは単なる仲の良いセフレという表現が1番ピンとくるかもしれない。
そんな付き合いだから別れもはやく、今まで本気になったということが無かった。

そんな自分が…自分の意思で行動する。

僕は結衣のおかげで変わって行くのかもしれない。

この時はそんな風にしか感じていなかったけど…本当に劇的に変えられるなんて思ってもなかったんだ。

それからは適当に時間を指定した。

昨日の電話で土曜も仕事だと聞いたので。確認をとるとその後ならいいと返事が返ってきた。

そして話は冒頭にもどる。

『はぁ…』

もう一度ため息をつくと後ろから不意に声がかけられる。

『ため息なんてついてどうしたの？』

佐藤愛だった。

『なんでここに？』

『あんたばか？買い物に決まってんでしょ』

荒っぽい言い方だ。愛は一言でいうと男勝りな性格だ、ついでにアニメヲタクだ。

『まぁ、そうだよね』

曖昧に返事をした。

『それはそうと…あんたは何してるのよ？』

『ちょっと待ち合わせだよ』

ははーんと愛はにやりとした。

『さては女だな、この時間ってことは朝帰りだね』

『なっ…そんなことあるわけないって』
こんなに慌てたら否定した意味がない

『ふぅん、相手は誰？私が知ってる人？』

『しらないと思うよ』

『見ていこっと』

『別にいいよ、自信無くさないようにね』

一人の女性がコンビニに入って来た。段々とこちらに向かってくる。

『なんで私が自信無くすのさ』
愛は目を点にしてみてきた。
その目が後ろの女性に向く。

その視線の方へ目を向けるとそこには彼女がいた。

『晃くん、お待たせ』

仕事帰りなので格好がＯＬ風と思いきや、一度家に帰ったのか薄い水色のワンピースに淡いピンク色のカーディガンを羽織っている。
装飾品などなにもつけていないがとても華があった。
『いや、別に待ってないよ』
お決まりのことをいうと僕の後ろに視線がいった。

『晃くんのお友達かな？』

『佐藤愛っていいます、晃くんは大学の同級生で…びっくりしたぁ。
晃のいったことがわかったな…たしかにこれは自信なくすね』
愛はマジマジと結衣を見る。

結衣は困ったような顔をして晃に助けを求めた。

『愛あんまりみるな、結衣さんが困ってる』

『いや、だってねぇ。こんな綺麗な人みたことないし…何処で捕まえたんだか』
そんな愛に内緒と言い腕時計をみると予約した時間になりそうだったので愛とおさらばすることにした。

『もう行こう結衣さん、こいつにかまってると時間無くなるから。
それじゃあな』
別れ際に愛はとんでもないことを言った

『お楽しみに！ゴムはつけるんだよ！』
というので僕はおもいっきり吹き出してしまった。結衣をみると茹で上がったタコのように赤くなっていた。

少し話ながら歩いていると結衣はふと思い付いたように言った。

『車置いて来たから』

話を聞くと結衣のアパートと僕のアパートは場所が近く、今日予約した店も割と近かったため歩きにしようとなったのだ。

なによりの理由が

『せっかく飲もうって誘われたのに飲まないなんて失礼じゃない』だそうだ。

5分ほど歩くとお店についた。

☆

一方その頃愛は誰かに電話をかけていた

『皐月皐月きいてよ！』

『なぁに～？』

『晃のやつがさ、女できたみたいなの！！』

『えぇっ！？』

『今見たんだけど絶世の美女って感じだったよ！！』

『ど、どうしよう…』

二人の話はこの後３０分も続いたという。

第7話：居酒屋（前書き）

更新遅れてすいません、いろいろと忙しかったので。

よろしければコメント等いただけるととてもありがたいです。

それでは第7話お楽しみください。

第7話：居酒屋

居酒屋『和』

和風料理とわいわいと騒げるようにということでこの名前がついたというのを先日大学院の先輩から聞いた。

そこは居酒屋というよりは飲食店といったほうがいいほどに落ち着いた感じの店だった。

ゆっくりと店内を見回すと奥のほうからお上さんがでてきた。

『室生君こんばんわいらっしゃい』

『西さんこんばんわ』

よく見ると西さんはなぜか浴衣姿だった。

先週までは確かに割烹着姿でいかにも居酒屋のお上という感じだったのに・・・またかと思った。

『また変わったんですか？』

『もちろん！やっぱり同じだと飽きられるからね！これお気に入りなの』

浴衣の袖を持ち、みせてくる。確か、割烹着のときも同じことを言われた。

何も知らない結衣だけがキョトンとしている。

僕はそれに気が付き急いで説明した。

『ここね、うちの研究室の飲み会でよく使わせてもらってるんだよ。この人は西さんっていってここの女将さんなんだ。』

いつもご贔屓(ひいき)にしていただいてますと西さんは頭をさげた。

『すっごい綺麗な人だけど、彼女？』

と西さんは僕の腕を小突いた。

『あたらずしも遠からずっていうところでしょうかね』

変な説明をすると突っ込まれるので適当に答えておいた。

『なにそれ、もしかして婚約者とか！？』

西さんは更に小突いてきた。

結依はちょっと顔を赤くしていた。

西さんは２０代後半ということを聞いてはいるが大学生と同じとしか思えないほど気さくな人だ。むしろ、僕よりも年下と思えるぐらいだ。一応常連さんには看板女将と呼ばれるほど人気があるらしい。

『いいから席に案内してください。こっちは客なんですから』

『はいはい、詰まんない男ねぇ』

西さんは僕たちを席に案内して注文きまったら呼んでねと入店してきた客の元へいき浴衣姿を自慢していた。

『変わった人なのね』

結衣はお客さんと話している西さんを見てつぶやいた。

『いや、コスプレが好きなだけみたいだよ。いろいろ変わるからそれだけを見に飲みに来るって人も結構いるみたい』

猫、メイド服、婦警、その他もろもろ本当にいろんな姿をみたが、似合っているのだから誰も文句を言わない。唯一、店の亭主だけが苦笑いをしていた。

『そうなんだ・・・あっ注文しよ!』

僕と結依はメニューをみて注文するものを話し合った。まずはビールってことで生中二つにおつまみに3，4品を注文した。

『『かんぱ～い』』

コツンと中ジョッキを合わせた。

『えっと・・・誘ってくれてありがとう。私こんな風に誘ってもらえないと男の人と関わるっていう機会がないから』

モジモジとして少し顔を赤くしている。

『こちらこそ、来てくれてありがとう』
結依が男の人と関わる機会がない？ばかな・・・こんなに綺麗なのに誘われることがないのだろうか。
でも、確かに考えてみると歯医者で人を誘おうなんか思うやつ俺以外いないよな・・・（笑）
合コンでもやれば別だけども・・・。

『ってことは彼氏は？』
『いるよ』
『え！？』
『うっそ～』
結依は舌をちろっと出して笑った。
『ほんとは高校3年から全然なんだ～恋愛運なくって』
と結依はビールをクイっと飲んだ。
フリー確定ということが分かり心の中でガッツポーズをした。
『そういう晃くんはどうなのよ、さっきは人を彼女にするし2股？』
少し怒ったような顔をしているが顔がどことなく赤い。
『2股なんてできるほど器量がないです。彼女は大学に入ってから

は全然ですね。これっていう人がいなくって』

ふ～んと中ジョッキを空にした。

飲むペースが速い。僕はまだ半分しか空いてないのに。

『次何飲みます？ここカクテル、日本酒、洋酒、サワーとか色んなのあるんですよ～』

『ワインがいい！』

西さんにワインを注文すると1本２０００円ぐらいのテーブルワインをもってきた。

『これ安いけど飲みやすいのよ！』

西さんはソムリエみたいに少し味見をする。

『うまい！』

『そうやって客のばっか飲んでると旦那さんに怒られますよ？』

西さんは腰に手をあて

『飲みたいから飲む！それでいいじゃない！』

周りからはそうだそうだという声が飛んだ。

『お～い、はやく料理運んでくれ』

『は～い、ただいま～』

それじゃと厨房の方へと消えた。

いつもああなんですよと僕は結衣に笑いかけた。

『楽しい人ね～、これおいしぃ～』

結衣は少し酔いが回ってきたのかほほを少し朱色に染めている。

僕も少しワインをもらって飲んでみたがとても飲みやすくグイグイいけた。

『お酒強いんですか？』

『ううん、弱いよ。いつもはビールコップ1杯でベロベロに酔っ払っちゃうの』

『え・・・そんなワインとかそんなに飲んで大丈夫ですか？』

結衣は意地悪そうに笑い。こういった

『敬語直したら教えてあげてもいいよ。私敬語嫌なのよね、あなたぐらいは普通にしゃべって』

綺麗な人が上目遣いで目をうるうるさせほほを朱色に染められたら、誰も逆らえないと思う・・・。

『わかった・・・』

よろしいと結衣は満足そうに笑い、ワインをグイっと飲んだ。

『実はぁ・・・もうよっぱらってきてるよぉ～』

すでに呂律が回ってないようだった。

それから30分ぐらいいろんなことを話しながらお酒を飲んだ。

結衣の高校、専門学校時代の話や僕の高校の話などを話していたが

結衣が目を閉じうとうとしているのに気がついた。

『結衣さん、大丈夫？』

こうしてみると結衣はとてもきれいだと改めて実感した。なんていうんだろう。何気ないしぐさでも彼女がやると見入ってしまい目が離せなくなってしまう。彼女の魔法だろうか。

ゆっくりと結衣は目をあけて

『さんはなしでしょあきら！』

『はい！？』

ビクッと大きな声で返事をしたので周りにクスクスと笑われてしまった。

次の言葉を待っていると彼女は自分の腕の上に顔をのせて気持ちよさそうに寝てしまったようだ。

『あちゃ～寝ちゃってるね』

西さんはいつの間にかテーブルのとなりにたっていた。とニヤニヤして僕をみてきた。

『お持ち帰りかい？』

『なっ！？』

なにもいわずに口をぱくぱくさせていると

『せいぜいがんばりなよ、これ会計ね』

西さんにお金を払い、結衣を背負って店をでた。

西さんどころか、主人までニヤニヤしていた。

どうしよう・・・。話しかけてもうぅんと悩ましげな反応しかしないし・・・。

結衣の家は知らないし・・・しょうがなく自分のアパートに結衣を運ぶことにした。

健全な男なら女の人を背負ったらそこに集中するわけで、僕も例外ではなくそこに集中してしまう。それに手は素肌に触れてしまっている。

とてもすべすべだった・・・。ってただの変態か。

アパートに着き、鍵を開けて入った。

結衣のリボンパンプスを脱がし部屋に入る。ベットに寝かせた。カーディガンを脱がせハンガーにかけ、布団をかけるとなにやらシアワセそうな寝言を言った。

『楽しかった』

フッと笑みが漏れ彼女の頭をなでた。

『また、どこか飲みにいこうね』

彼女は意識がないはずなのにこくっとうなずいた気がする。

きっと気のせいだろう。

押入れから毛布を出しソファに横になった。結衣が寝返りをうち顔がソファのほうへ向いた。

長い睫毛だなぁ・・・それに綺麗だし・・・なんで僕なんかとという疑問が浮かんだ。

そんなことを考えながらしばらく、結衣の横顔を見ていたが酒も回っていたのでまぶたが重くなり・・・寝た。

結衣がうっすらを目を開けて様子を伺っていたのには気がつくはずもなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4060a/

魔法ノコトバ

2010年10月9日21時15分発行